平成３０年度

京都市保護司会連絡協議会特別シンポジウム

薬物依存に陥った人の多くについて、仕事や人間関係などにおいて社会の中でうまくいかず、しかも真剣に相談にのり支えてくれる身近な人がいないという状況が見られます。そして、いったん違法薬物に手を染め捕まると、これまでの生きづらさを抱えたまま、犯罪者として扱われるようになるため、ともすれば周囲に対して嘘をつく、隠れる、孤立するといったことになり、そして不安から再び薬物を使用するという悪循環に陥りがちで、依存からの脱却と立ち直りが難しくなっています。～ シンポジウム開催主旨より抜粋 ～
そこで今回、薬物の高い再犯率を低くする一つの試みとして、薬物依存者の心と体の健康を願うと同時に地域社会に向けてメッセージを発信するため、シンポジウムを開催することとなりました。

薬物依存症は病気です。

薬物依存症の回復は人間関係の回復から

コーディネーター
京都市保護司会連絡協議会
会長 澤井早和乃

パネリストプロフィール

川畑俊樹（かわばたとしき）
京都府立洛南病院　副院長
大学卒業後、精神科医となる。平成２年京都洛南病院に赴任以来約３０年にわたって治療にあたる。最前線の現場で患者とともに依存症と向き合い、社会復帰を助けている。

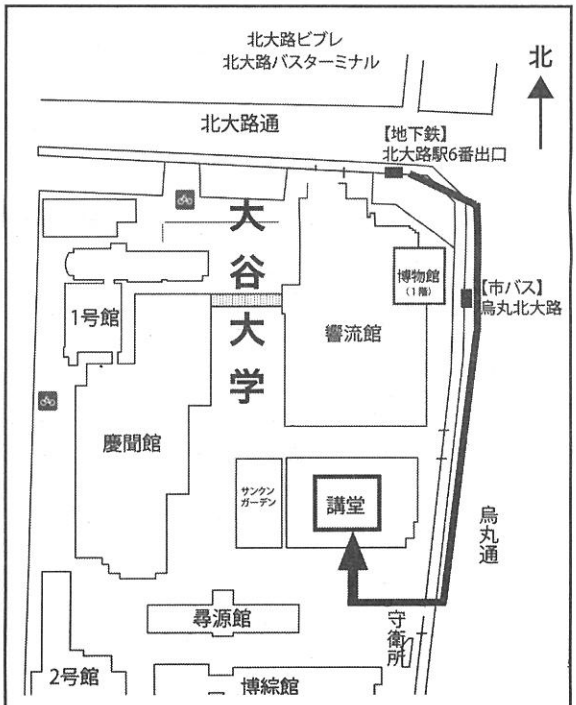
市川岳仁（いちかわたけひと）
特定非営利法人三重ダルク代表
1999年三重ダルク開設。2010年～2013年三重県地域生活定着支援センター相談支援員 2014 年一般社団法人ソーバーリビング開設（代表理事）2015年法務省より保護司の委嘱を受ける。龍谷大学大学院法学研究科修士課程修了、精神保健福祉士

上野修（うえのおさむ）
左京区保護司会理事
2006年～法務省より保護司の委嘱を受ける
2015年～左京区薬物乱用防止指導員協議会会長 2018 年 9 月国連アジア極東犯罪防止研修所で開催された保護司国際研修に参加し「薬物依存症は病気です」を発表。「薬物政策とハームリダクション」を聴講

平成 31 年 3 月 13 日(水)
午後 1 時 30 分 開演
（受付開始 午後１時）
入場無料
会場：大谷大学講堂（地下鉄烏丸線北大路駅下車すぐ）

主催　京都市保護司会連絡協議会
共催　京都府更生保護女性連盟 京都府薬物乱用防止指導員協議会
後援　京都市（予定）京都市教育委員会（予定）京都府教育委員会
（予定）京都市少年補導委員会 京都少年鑑別所 京都保護観察所
協力　京都府健康福祉部薬務課 京都市保健福祉局医療衛生推進室
医務衛生課 左京区保護司会 京都 BBS 連盟

問い合わせ：シンポジウム実行委員会事務局
〒602-0032 京都市上京区烏丸通今出川上る西入岡松町 255
FAX:075-417-2046



講演会場には駐車場がありません。
公共交通機関等でのご来場をお願いします。

シンポジウム開催には、一部「公益財団法人京遊連社会福祉基金」の助成金が使われています。

薬物依存症の回復は人間関係の回復から

「薬物依存症は病気です」

京都市保護司会連絡協議会 会長
澤井 早和乃

薬物依存に陥った人の多くについて、仕事や人間関係などにおいて社会の中でうまくいかず、しかも真剣に相談にのり支えてくれる身近な人がいないという状況が見られます。そして、いったん違法薬物に手を染め捕まると、これまでの生きづらさを抱えたまま、犯罪者として扱われるようになるため、ともすれば周囲に対して嘘をつく、隠れる、孤立するといったことになり、そして不安から再び薬物を使用するという悪循環に陥りがちで、依存からの脱却と立ち直りが難しくなっています。

「ダメ　ゼッタイ」に象徴される薬物乱用防止教育は全国的に大きな広がりを見せており、新たに薬物に興味を持つ人の乱用を防止する意味では大きな意義を有していると思いますが、一方で、違法薬物を使用してしまった人の社会復帰を考える上では、私たち保護司のみならず、社会全体においても、犯罪からの更生という視点に偏ってしまい、薬物依存全体への理解が不十分ではなかったかと、今改めて考えます。

保護司はボランティアとして、違法薬物に限らず心ならずも罪をおかしてしまった人の立ち直りに寄り添い社会に復帰するためのサポートを行なっていますが、私たち京都市保護司会連絡協議会は、薬物依存症の回復は人間関係の回復から「薬物依存症は病気です」のビデオや特別シンポジウムを通して、薬物依存症について学び、薬物の再犯をやめたいと思っている人、自分は何回も大切な人との約束を破ってしまうダメな人間、と自分に呆れかえっている薬物依存者に対して、罪を償うことは当然ですが、病気だからやめられないのは当たり前。あなたはダメ人間ではない！病院へ行って治療を受けようというポジティブな考え方へと導くことができればと願います。

また同時に、地域の更生保護に携わる私たちが、薬物依存者は犯罪者であると同時に、薬物依存症という病気にかかっている人であるという認識を持つことが、薬物依存者に対しても、その家族、友人に対しても、健康を願う気持ちが伝わり、薬物の再犯を防ぐ要因になりうるという思いに至っています。

脱法ドラッグについても、その名で言われていた時代、使用して体に異常を感じた多くの人が、病院へ駆け込んだそうですが、危険ドラッグと呼ばれるようになった途端、病院へ駆け込む人は激減したそうです。犯罪者であるということを強調すれば、表に出て来るのではなく、ひたすら地下に潜って行く傾向があります。

薬物の高い再犯率を低くする一つの試みとして、京都市保護司会連絡協議会は、薬物依存者の心と体の健康を願うと同時に地域社会に向かって薬物依存症の回復は人間関係の回復から「薬物依存症は病気です」というメッセージをシンポジウムを開催し京都から発信したいと考えます。